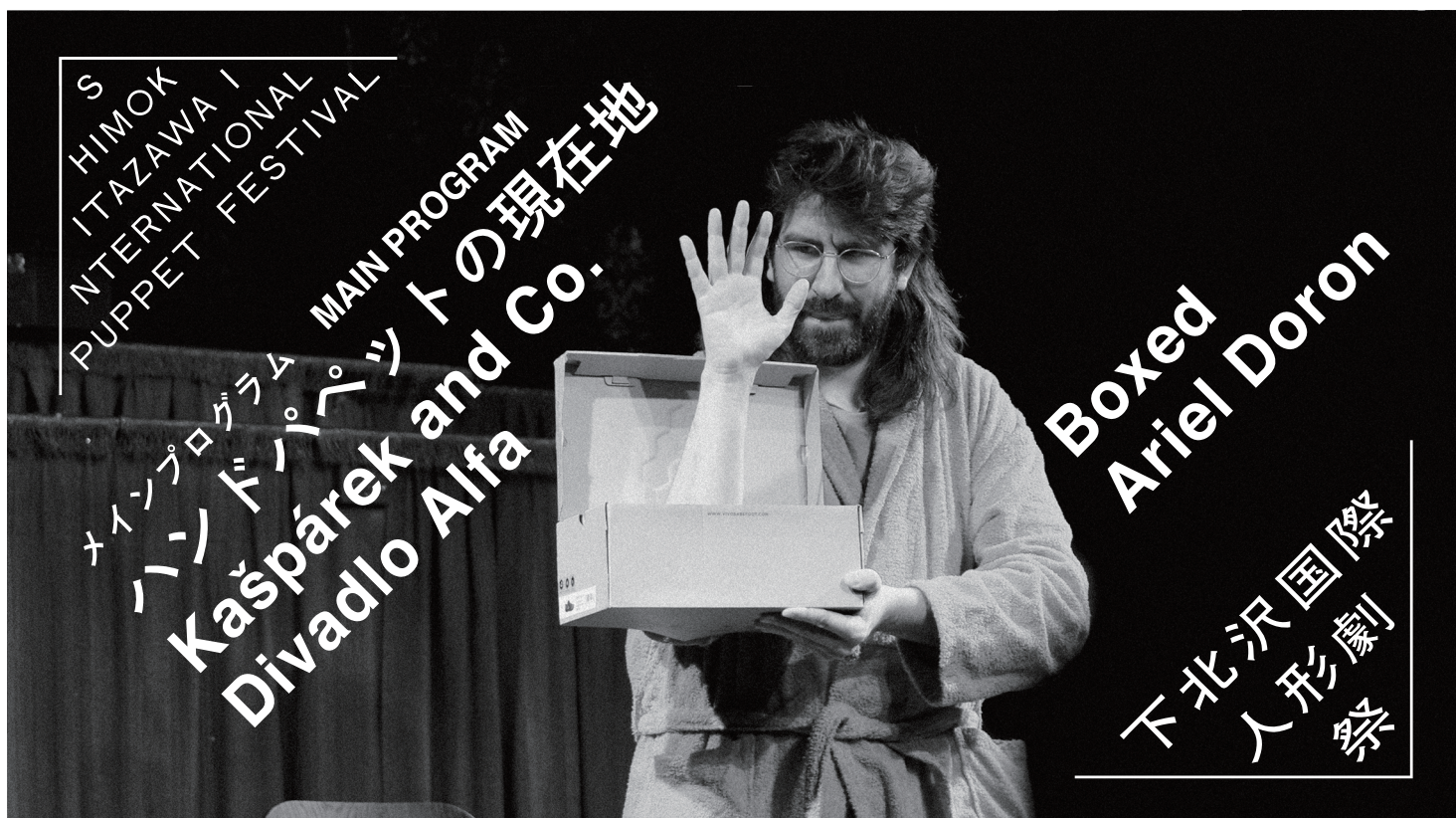


第1回下北沢国際人形劇祭2024

DAILY JOURNAL

DAY 4

Ssturday,
February 24,
2024



S
HIMOK
ITAZAWA I
NTERNATIONAL
PUPPET FESTIVAL

メインプログラム MAIN PROGRAM
ハンドドパペットの現在地
Kašpárek and Co.
Divadlo Alfa

Boxed
Ariel Doron

下北沢国際
人形劇祭

『Kašpárek and Co.』/Divadlo Alfa (チェコ)

道化の姿のカシュパーレクは赤ちゃんのお世話にスープ作り、死神の相手までこなし、慌ただしい一日を送る。人形の素早い動き、感情の表れた声、その場で奏でられる効果音、誇張された表現、時折差し込まれる皮肉など、確かな技術が巧みな演出に彩られ、子どもから大人まで思わず笑ってしまうドタバタコメディ。とくに死神の異質感とコミカルさが特徴的だ。どこか「死の舞踏」と落語「死神」を思い出し、恐ろしいものが滑稽なことをしている様子というのは、なぜこうも諧謔的なのかと興味深く思う。

これは余談だが、劇中で赤ちゃんの人形が客席に向かっておしっこ（実際は水、たぶん）を飛ばす演出があり、それを見た観客の子どもが「3Dだ!!」と歓声を上げていたのが、非常に面白く感じた。その子にとっては、客席におしっこが飛んでくるまでは、カシュパーレクの生活はスクリーン上のものだったのかもしれない。第四の壁はこうして破られ、客席の一体感と熱気はますます高まっていった。

『Boxed』/ Ariel Doron (ドイツ)

自分の手が異物であり、他者であり、ままたまならない。身体と意識の不一致はカフカの『変身』を思い出すが、この劇では演者の右手は彼と別の生命体として表現されて

いる。意のままに操れない、何なら反抗すらしてくる「手」という何かに振り回される男の物語。自らの右手を自分の意思で制御できない別の存在として捉えたとき、それを操るということは紛れもなく人形劇である。

劇中、男が言う事を聞かない「手」をノコギリや電動ドリルやハサミで攻撃しようとするシーンで、観客のちょっとした悲鳴が起きた。それは、箱に入っている異物としての「手」と、「演者の右手」ということを観客が同時に理解しつつ、その重なり合うところで笑いと悲鳴が起きていくというのではないだろうか。意味の変換が自然に行われていく鮮やかさと巧みな演者の動きに、興を覚えた。

大澤萌 (デイリージャーナル編集部)

The Now of Hand Puppets is quite literally its name—hands, and, puppets, featuring two shows—Kašpárek and Co. and Boxed—whose performances tap into diverse ways of how the manipulations of hand make itself the spotlight and backbone of the shows.

Kašpárek and Co. tells the story of its protagonist, Kašpárek, a hand puppet who struggles with household and babysitting. Kašpárek is careless: he “accidentally” throws their baby into a

boiling soup, and locks the baby in the drainage. But it is not all him to be blamed, for the baby does seem headstrong messing with Kašpárek—even embarking on an imaginary adventure with a Grim Reaper and their dog. While manipulating the puppet through their hands, the performers imitate the voices of each character and create sound effects that enhance the comicality of the show real-time. The immediacy, along the mastery of hand-acting, is truly one of the sparks of live-time puppet shows.

Boxed, however, is more “straightforward” with “hand”—for it is directly the acting of hand: a man receives a box, and opens it to find a real hand inside. Their interaction is lovely at first, only to escalate to unpredictable confrontations. In the end, the man wakes up, and finds the box empty—so it was his own hand? No one will know, as identity and self-awareness are forever an enigma. Ariel Doron delivered with his mastery of manipulating the movements of his hand a sense of derangement and separation that is yet relatable to its audiences. 谷賢上 (デイリージャーナル編集部)

メインプログラム MAIN PROGRAM

ハンドパペットの現在地

Kašpárek and Co. Divadlo Alfa Boxed Ariel Doron

チェコのアルファ人形劇場『Kašpárek and Co.』。カスペルとその家に住む妻・赤ちゃん・犬、そして死神のコミカルな喜劇。チェコの人形劇で道化役を一般に指す名であるカスペルのキャラクターは、冒頭の幕に出てくる役者によってこう説明される

「仕事がきらい。買い物嫌い。寝るのが好き。たくさんの酒と、食べ物も好き」。カスペルは妻から子守りや料理を頼まれるが、遊びの誘惑や、いたずらおぼけよく出てくる死神に邪魔をされ、毎回うまくいかない。しばらくして妻が様子を見に来ると慌てふためく。毎度叱られ、かなわない。チェコに13もある公立人形劇場のひとつであるアルファ人形劇場は、伝統的な技法を踏襲しながらも現代的なトピックや演出を取り入れることで知られる。実は数年おきに来日公演をしており、そのため過去に他作品を目にしたことがある来場者も多いのではないだろうか。本作もストリートで上演される昔ながらのスタイルであるが、筋書きはまさに現代でも「あるある」な家庭の風景であり、忸怩なしに面白く、飽きさせない。日本の観客たちにも文化を超えて、狙い通りにヒットした。

2022年に来日して巡演した『快傑ゾロ』に続き、アルファの役者たちは今回も台詞を日本語化することに挑戦した。もちろんいかにも不自由な言葉選びだが、もとよりノンバーバルの芝居である。むしろ最低限の台詞が絶妙であることが、観客の理解を



助けつつ笑いを呼ぶ、重要な魅力であったろう。

続くアリエル・ドロンの『Boxed』。上演を終えたアルファの舞台の前に椅子を置いて座り、通販の段ボール箱を開けると、リアルな「手」がひとつ。トルソーよろしくいじくり回してみたり、いたずらめいたことをさせてみたり。客席からも笑いが起きる。だが目を離れた隙に自ら動き出すとなると……話が違う。どんどん際どく暴力的になっていく舞台上の出来事に、観客は息を飲み、悲鳴を上げる。

暴走する「手」はもちろん、箱の底の穴を通った演者自身の手であり、この作品における「ハンドパペット」はハンドそのものである。舞台を観る全員がからくりをすぐに理解するからこそ、自分のものではない「手」を使っていたずらをする、「手」が封じられた箱から忽然と消え驚く芝居は、仕組みを俯瞰したメタ的な表現のようにも映る。カーテンコールで、アルファのメンバーが言っていたのと全く同じ口ぶりで「舞台上に来て、人形を見てください」（もちろん人形などない）とジョークを飛ばし、爆笑をさらうのも憎い。

広報でも触れこまれた卓越した操作技術はもちろん、本作がコロナ禍の制作物であること

も注目したい。芸術作品ができるまでに必要な、十分に継続したインプット・それが消化される時間・成果物をブラッシュアップする対話、パンデミックのもとではこれらが不自由であり、加えて舞台芸術にとっては発表する場の存亡すら危うかった。芸術家にとって逆風であった時期に魅力ある作品が生まれ、パンデミック後もなお人々を惹きつけているのは素敵なことだし、その才を称えたい。

児童演劇の劇作家・演出家である西上寛樹は、演出作『はれときどきぶた』について語る中で、「承諾の笑い」について述べている。曰く、観客は、芝居が面白いやり取りでなくても、自身にとっても経験があれば「わかるわかる！」と笑ってしまう。日常の何気ないことでも、それを的確に描写する動きで、観客とのつながりを持つことによって、物語が始まる。

冒頭で紹介した、アルファの幕前の説明はこう続く。「カスペルはわるいやつではない。たのしいものが好き。わたしたちはみんな、カスペルが大好き」。善いこと・悪いことにかかわらず、舞台上で起こることと観客の間に生まれる共感、それを丁寧にデザイン的に描き出す創作者の技能が、文化や世代を超えて、絶えずにぎやかで楽しい客席を作っていた。

稲田和巳（デイリージャーナル編集部）



サイドプログラム SIDE PROGRAM

第一回

インターナショナル・ パペットスラム

さあ、一緒に人形劇やろうぜ！パペットスラムに登場する人形たちと人間たちは観客たちをそう誘う。それは、会場に到着してすぐ、舞台から犬小屋が登場したときからずっとそう。赤い屋根の犬小屋からは元気な犬がでてきて、「わんわん！」と鳴く。「わんわん！」と私たちは興奮して叫ぶ。のんびりしているこの犬と、緑の屋根の犬小屋から出てくるふわふわの謎生物の二匹（小屋も動くので、カウントは二匹+二小屋かも）のひょうきんなかけあいによって各演目が紹介される。最初の演目は、ペトル・ポロフスキーの『ハエ』。まず印象的なのは、老人の人形が演者のこぶしから形作られていることだ。この老人は、ハエを叩いたお玉でかき混ぜた鍋を観客たちにふるまう（ちょっと食べたくない）。鍋の中にあつたのは、二つの目玉とそれをつなぐひも。そう、老人の顔を作り出すアイテム。鍋をふるまわれた私たち観客も、この目玉ひもを使って手で老人の人形を形作り、すぐ人形劇できるのだ。

次の演目は、角谷将視（ゼロコ）の『まるめた紙』。この演目では、くしゃくしゃの紙が、たばこの煙になったり、人の形をとったり、だけど身体の上に頭をのせるのに失敗したり、とにかく無限の可能性を秘めている。そして、くしゃくしゃの紙を捨てるんじゃなくて、人形にして遊びたい。ここまでこぶしと紙が生き生きと動くのを見ていた私は、大谷敏子/sikakuicoの『スパーキー・クラウド・ジュニア達』で、冷や水を浴びせられる。この演目では、かわいらしい5体のぬいぐるみが登場するが、演者は無表情で、5体を雑に扱う。無造作に落とされ、白い布で首や体をくくられるぬいぐるみたちを見ると、「もうやめて！」と叫び

たくなる。人形は演者の扱い次第でモノになる、という恐ろしさを体感する。

休憩時間、『ハエ』の老人からもらった目玉ひもを使って、さっそく友達が即興人形劇を始める。それに連鎖して近場では、布を貸してくれる人、うまい演技方を教えてくれる人、とりあえず目玉ひもを借りて演じてみる人（私）が現れる。初めて会った人や久しぶりに会った人とわいわいできて楽しい。

デボラ・ハントの『私有』。工事現場にありそうな、くすんだ灰色の袋の上に灰色の顔がある印象的な人形たちは、現代社会の重さをまとっているようだ。『私有』と書かれた水道の蛇口が、だんだん他者を寄せ付けないように高くなり、柵で囲われていき、その柵に人形がくし刺しにされる様は恐ろしい。でもあの印象的な袋の人形は動かしてみたい。

はとの『悪魔と女』は、大きなトリを被り、黒いドレスを着た演者のドレス上で人形劇が展開される。幼稚園の頃見た、エプロンの上で展開する人形劇を思い出したが、黒いドレスの上で、男女のトラブルを見ていると、それとは違うダークな味わいがある。金髪の美しい女性人形の首をハサミでチョコチョコキして、その首を移植した女が男に振り向いてもらうシーンは衝撃的だった。

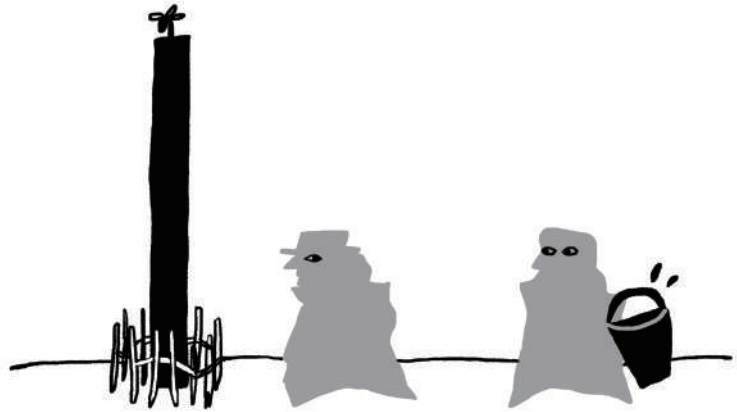
役者でない『body』は、演者の上半身がしゃべるしゃべる。両手が口論し、左肩は右肩に愚痴を言い、足はくつしたを脱いで自己の貢献を主張し、

最終的に言葉にならないうごめきと叫びで身体が主張する。そして私は気づく。『ハエ』で示唆されていたように、『body』で衝撃的な形で示されたように、身体こそが最大の人形だったのだ。

仲谷萌の『干し草』では、ごく普通の小さな一軒家が登場する。ただし、この一軒家の食卓に置いてあるのは、料理ではなくて、干し草だ。この干し草を食べる二匹の動物が、ちょっとお互い遠慮しつつ、とはいえお互いのことを気にしつつ、微妙な距離感だ。ふつうのようであってふつうでない状況が成立しているのが面白い。

最後は、ヤクブ・イエリーネクの『NEXT LEVEL』。銀色のモノたちによる弱肉強食の世界と、その中で弱者であったモノが生き残るまでのストーリーがループして描かれる。銀色のモノたちはペン立てのようであり、ランプのようであり、ネジのようであり、どれも無い。だが、それが「何」かは関係ない。演者が動かすと、それは捕食者から逃げつつ知恵を絞る被食者の群れであり、それはニヤニヤしながら被食者を狙う捕食者である。モノがモノのままで生きものとなるさまに驚いた。さあ、人形劇やろうぜ。こぶして、紙で、身体全体で、エプロンで、銀色の何かで。人の形をしているかどうかは関係ない。そして、同時に人形が人形でいられない時はいつか、それを体感しよう。この多面的な魅力こそ、私がパペットスラムから受け取ったものだ。

東風ゆば（デイリージャーナル編集部）



音楽テント

Re: 本田祐也の 移動広告テント トラベルムジカ

あいにくの雨。14時にザ・スズナリに行く。裏手にある青色の小さな小屋へ案内された。そこが雨天時の会場らしい。中に入るとすでに多くの人が集まっていた。部屋の真ん中には色とりどりの薄い布がテントのように広がっていて、その周囲を鍵盤ハーモニカやチューバ、クラリネットなど様々な楽器を携えた人々と、小さな人形を手を持った人々、たくさん観客が取り囲んでいる。私が入ったときは「音楽テント」の練習の時間だった。楽器演奏者と人形の操り手がランダムに選ばれ、即興で人形劇をする。そこに何

か明確なストーリーがあるわけではない。人形は気の赴くまま上を向いたり下を向いたり他の人形に近づいてみたり、飛び跳ねたり寝転がったりする。その跳躍や動きの速さに合わせて、音楽の大きさやスピードも変化する。人形たちがその時間を十分に楽しんだら、観客の拍手に包まれて練習が終わる。いよいよ「音楽テント」の本番だ。色とりどりの薄い布は四方のポールに繋がっていて、そのポールを動かすことで布がくるくると回り出す。テントの中の楽器隊がリズムカルな音楽を奏でると、そのテンポに合わせて子どもも大人も自分の人形を動かして、回り始める。小さな小屋が一体となって、小気味よい音楽に自然と拍手が起こる。音楽の途中でランダムに指名された人形遣いと演奏者は、好きなテントの面で即興の人形劇を行い（さっきの練習はこれのこと）、それが何度か繰り返される。音楽はますます熱気を帯びて、テントは回り続ける。

人形を操る人は、小さな子どももいれば大きな大人もいる。彼らの様子は様々で、リス

ムに乗って活発に参加する人もいれば、少し恥ずかしそうに照れている人もいる。しかし彼らの手にしている人形は皆ゆっくりと他の人形に近づき、優しい挨拶を交わす。飛び跳ねる人形を追ったり、人形の影に反応したり、人形と人形と一緒に遊び始める。そこには、人の心が人形を伝って相手の人形に伝わる、人形を介した出会いと会話の場が生まれていた。一方で「音楽テント」は、全員が同じ態度で参加することを求めない。私の斜め左には、テントが回るのを腰に手を当ててじっと見つめる男の子が立っていた。彼は他の参加者に握手を求められるが、静かに首を振って断る。けれどそこから立ち去るわけでもない。その態度は私にとって、何だかとても快いものに感じられた。それでいいのである。どんな楽しみ方をしてもいい、どんな感じ方をしてもいい。私が誰であっても、あなたが誰であっても、この場所に居ていい。そんな空間が、「音楽テント」によって作り出されていたように思う。

大澤萌（デイリージャーナル編集部）



かたや隠れた人間が操作するパペットたちが織りなすユーモラスな物語 (Divadlo Alfa の『Kašpárek and Co.』)。かたや人形らしい人形が登場することのない一人芝居 (Ariel Doron の『Boxed』)。二つの併演作品はあまりにかけ離れているとはいえ、残酷

なもの・暴力性に対する敏感な感受性を二つの共通点として認めることは可能ではないかと思われた。前者は主人公・カシュパーレクが赤ちゃんの世話を引き受ける内容だが、そこでしばしば笑いを引き起こしたのは赤ちゃんの扱いのひどさだった。カシュパーレクと赤ちゃんの親とがキャッチボールのように赤ちゃんを押し付けあったり、赤ちゃんこに潰したのちに空気を

入れ直して元通りにしたり、不注意でスープに入れて煮込んでしまったり、などなど。もちろん。これらをリアルに再現したら残酷になりすぎてしまうが、人形を介することでユーモラスになりえていたのだ。他方で後者の残酷さはより明確だ。生を得て暴走した手のオブジェ (作品の序盤で観られた、左手があたかも動かないオブジェ=手の人形であるかのように見せる演技はあまりにリアルだった) を止めるためにハサミが突き刺され、血が飛び散る。子どもにもしばしば見られるような、残酷なものに対する (時に拒絶と重なるような) 興味。それを和らげつつ受け止めるような役割を人形劇が持ちうるということ。この併演を通して、そのことにあらためて気付くことができたように思われた。

石田裕己 (デイリージャーナル編集部)



サイドプログラム SIDE PROGRAM 第一回 インターナショナル・パペットスラム

夜だった。まったく不思議な夜だった。9つの異なる短い人形劇たちに、僕は1つの感覚を感じていた。

アメリカ、チェコ、日本。3つの国から集まった8組のパフォーマーとMCが1組、9つとも方向性や雰囲気、価値観、内容もまったく違ったものだった。それは当然だろう、彼ら彼女らが育った文化やルーツ、影響を受けたものは全く違うのだから。しかし、不思議なことに全て見終わった感覚としては9つの短編劇を観た、と言うよりは、1つの劇を観た、という感覚を持っている自分に気がつく。

その大きな要因として、興味深いのはMCの人形たちが持つ狂言回し的な要素は大き



いだろう。様々な人形が一瞬の短い間、舞台の上で、そして、ほとんどの場合は机の上で (もちろん床の上で展開される興味深いものもあったが) 命を吹き込まれては、また消えてゆく。その一瞬一瞬の移ろいを観客である僕たちは目を凝らす。1つのパフォー

マンスが終わったあと、観客を次のパフォーマンスまで持つていくための人形劇パフォーマンスと言える素晴らしいMCであった。机上の空論、という言葉がある。僕はこの言葉が好きだ。机の上に展開され、想像され、転がされ、机の上でしか存在し得ない、妄想や仮想、空想。なんだか物凄くファンタジーに溢れて、ロマンを感じないだろうか？僕が感じた1つの感覚はきっと、この机上の空論的感覚だったのだと思う。机の上でしか、或いは人形劇、オブジェクトシアターでしか、観客の中に生まれえないファンタジーのような、ロマンのような感覚。それを創り出すのがパペットスラムというフォーマットなのではないだろうか。まったく不思議な夜だった。パペットスラムの夜、という未だ感じたことのない不思議な余韻をもう少し感じることにしよう。上原英治 (デイリージャーナル編集部)

MANGA

RYOKO ANDO



**今日の
デイリージャーナル編集部**

文：
大澤萌 石田裕己
谷賢上 上原英治
稲田和巳 東風ゆは

絵：
赤羽悠那
マユキー・カーン

写真：
山口梓沙

音楽テント Re: 本田祐也の 移動広告テント トラベルムジカ

『Re: 本田祐也の移動広告テント』は本来、広場から出発して市街を練り歩くことを予定していたらしい。演劇祭内のプログラムであることを知りつつ集まった人々が、群れをなして一団とともに出発する。事情を知らない通行人たちも興味を持って次第に加わっていく。そのようにして、他のプログラムに集まる（主に演劇祭に直接興味を持った人々からなる）集団とは多少なりとも異質な集団が少しずつ形成されていく。そんなプログラムになるはずだったのである。しかし、だ。当日はあいにくの雨で、教会の狭い室内が会場となった。そこでの実行にあたって採用されたのは、テントを中心に人形を持った子どもや大人が歩き回り、楽器隊がその周辺に控え、さらにその周りを囲うように鑑賞者たちが配置されるという形式だった。この配置ゆ

えに鑑賞者の視界にはつねに他の鑑賞者が映るし、そもそも人形やテントを操作する人々は楽器隊ほどパフォーマー然としておらず、普通の鑑賞者とそう変わらない人であるようだ（実際、集合時間に人形を持って来さえすれば、だれでもパフォーマーとしてこのプログラムに参加できたのだ）。こうした要素は、参加者と鑑賞者の境界がゆるぎような感覚をもたらすものとなっていた。そしてこの感覚は、物珍しげな通行人に見られつつ、パフォーマーたちと並んで歩くことで鑑賞するときに覚えるものに近いのではないかと。石田裕己（デイリージャーナル編集部）



アリエル・ドロンさんのトークを聞こう！

本日の公演「Boxed」を行ったアリエル・ドロン氏のトークイベントが行われます。この機会に是非ご参加ください。

日程：
2024年2月28日（水）19:00～

会場：
ゲート・インスティトゥート東京2階 図書館

言語：英語（日本語通訳つき）
料金：入場無料、事前のお申し込みにご協力下さい。
03-3584-3201t
info-tokyo@goethe.de

「演劇についての新たな考察」は現代演劇への独自の切り口を紹介するシリーズです。今回は「下北沢国際人形劇祭」に来日する演出家で人形遣いのアリエル・ドロン氏を招いて、自身の作品を紹介いただくとともに、現在のドイツをはじめとするヨーロッパの人形劇やオブジェクトシアターの新しい傾向についてお話をうかがいます。対談のパートナーとして、「下北沢国際人形劇祭」の企画・統括を担当されている山口遥子氏に加わります。（公式サイトより引用）



SIPF ショップ & フェスティバルバー BONUS TRACK 冬市出店中！ あそびに来てね！

